



このコーナーは新刊の心理学関連書籍を著者自らにご紹介いただくコーナーです。

うつ病の行動活性化療法

新世代の認知行動療法によるブレイクスルー

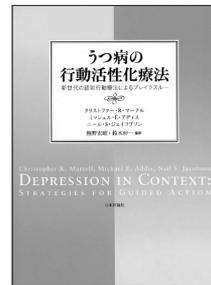
鈴木伸一

うつ病の認知行動療法が主なターゲットとしている「後ろ向きで柔軟性を欠いた思考（認知）」は、うつ病の病理の中核であるといえるが、うつ病の臨床実践において、認知のみに着目したアプローチは必ずしも奏功しない。認知へのアプローチに加え、自発的行動の拡充とその行動に関する随伴性知覚を再獲得していくための行動的アプローチが不可欠である。

本書は、うつ病治療における新世代の認知行動療法として注目されている行動活性化療法（Behavioral Activation）について、

理論から実践まで系統的に解説した日本で最初の訳書である。具体的には、うつ病患者が陥りやすい苦痛体験からの回避と自己嫌悪の悪循環のパターンを明らかにし、その悪循環から抜け出すための具体的方法を検討するとともに、自らの価値（目的）に沿った行動の選択がどのような結果を導くのかを体験的に学んでいくという一連のプロセスが紹介されている。

本書が、うつ病の困難症例への対応や社会復帰支援の新たなブレイクスルーとなることを期待している。



監訳 熊野宏昭・鈴木伸一

発行 日本評論社

A5判／288頁

定価 本体 3,200円＋税

発行年月 2011年7月

すずき しんいち

早稲田大学人間科学学術院教授。専門は臨床心理学（認知行動療法）、医療心理学、行動医学。著書はほかに『うつ病の集団認知行動療法 実践マニュアル』（共編著、日本評論社）、『社交不安障害』（監訳、金剛出版）、『医療心理学の新展開』（編著、北大路書房）、『実践家のための認知行動療法テクニックガイド』（共著、北大路書房）、『慢性うつ病の精神療法』（監訳、医学書院）など。

犯罪と市民の心理学

犯罪リスクに社会はどうかかわるか

小侯謙二

これまでの犯罪心理学は「犯罪者」理解をその中心に置いてきました。しかし現在の犯罪をめぐる社会状況を見ると、犯罪者理解に加え、被害者問題、防犯対策、裁判員制度などの司法改革など、犯罪に関わる現場では犯罪「現象」への多面的な心理学的研究が求められています。

本書は、第一部で犯罪不安やリスク認知、被害者非難など、犯罪現象に対する市民の意識と行動に触れ、第二部では防犯に関する心

理学的研究を紹介し、第三部で裁判員制度や被害者支援という司法分野での心理学の役割を考えることで、こうした課題への心理学の貢献の可能性を考えます。そしてまた、こうした犯罪現象への多面的研究を通じて、犯罪心理学以外の知見や理論との統合の可能性を考えます。大学や研究機関の研究者のみならず、実務分野の方にも目を通していただけることを願っています。



編著 小侯謙二・島田貴仁

発行 北大路書房

A5判／320頁

定価 本体 3,200円＋税

発行年月 2011年5月

おまた けんじ

駿河台大学心理学部教授。専門は犯罪心理学、環境心理学、社会心理学。著書はほかに『住まいとこころの健康：環境心理学からみた住み方の工夫』（編著、ブレーン出版）、『都市の防犯：工学・心理学からのアプローチ』（分担執筆、北大路書房）、『環境心理学』（分担執筆、朝倉書店）、『犯罪に挑む心理学：現場が語る最前線』（分担執筆、北大路書房）など。



編著 鳥居修晃・川上清文・高橋雅延・遠藤利彦
 発行 東京大学出版会
 A5判 / 232頁
 定価 本体 4,400円＋税
 発行年月 2011年8月

かわかみ きよぶみ
 聖心女子大学文学部教授。専門は発達心理学。著書はほかに『ヒトはなぜほえむのか』（共著、新曜社）、『子育て支援に生きる心理学』（分担執筆、新曜社）、『乳児のストレス緩和仮説』（共著、川島書店）、『チンパンジーの認知と行動の発達』（分担執筆、京都大学学術出版会）、『社会・情動発達とその支援』（分担執筆、ミネルヴァ書房）など。

心のかたちの探究

異型を通して普遍を知る

川上清文

臨床でよく引用されるという聖書のことは「天にては、悔改めを必要としない99人の義人よりも悔改める1人の罪人に対して、喜びがあるであろう」（ルカ、田川建三訳、作品社）は、個の重要性を説いている。心理学でも、量的研究の対比として、質的研究が重要であることは常に指摘されてきた。しかし、それらの多くは傍流の発言でしかなかったといえよう。

本書の副題は「異型を通して普遍を知る」である。心理学主流への明白な挑戦状であろう。従来から質的研究に重きを置いてきた臨

床心理学だけでなく、多領域からアプローチしているのも、本書の特長のひとつである。鳥居修晃が先天盲の開眼事例を、柴崎光世が脳損傷例を、重野純が特異な発話を、佐々木正宏が病的悲嘆を、川上清文が乳児微笑を、巖島行雄が目撃証言を、高橋雅延が超記憶者を、往住彰文が天才を、篠田彰がミツバチを対象に書いている。そして最後に遠藤利彦が各章を解題しつつ総括している。

難しいテーマだけに企画から完成までに何年もかかった。速成ではない内容を、ぜひご批判いただきたい。



編著 楠見孝・子安増生・道田泰司
 発行 有斐閣
 A5判 / 258頁
 定価 本体 3,100円＋税
 発行年月 2011年9月

みちた やすし
 琉球大学教育学部教授。専門は思考心理学、教育心理学。著書はほかに『よくわかる学校教育心理学』（分担執筆、ミネルヴァ書房）、『言語力が育つ社会科授業』（共著、教育出版）、『クリティカル進化（シンカー）論』（共著、北大路書房）、『おもむく思考のラボラトリー』（分担執筆、北大路書房）、『クリティカルシンキング』（共訳、北大路書房）など。

批判的思考力を育む

学士力と社会人基礎力の基盤形成

道田泰司

みなさんは、批判的思考（クリティカルシンキング）の本を読まれたことがあるでしょうか。多くはビジネス書や啓蒙書、教科書で、専門書はほとんどありません。批判的思考は、古くはソクラテス以来の哲学の伝統があり、現代ではGlaser（1941）以来、実証的・実践的・理論的研究が蓄積されているのですが、なかには先行研究を踏まえず、著者なりの思考法について論じているだけの本も少なくありません。

さて本書は、心理学を中心とした批判的思考の専門書としては本

邦初のものであり、科研グループでの4年間の成果が盛り込まれています。理論編と実践編とに分かれており、理論編では、批判的思考の概念や各種リテラシーとの関連、認知プロセス、測定、社会・文化的側面、適応的側面を扱っています。実践編では、いくつかの大学で行われている、良き市民や良き学習者を育てる批判的思考教育の事例9つを紹介しています。批判的思考についてきちんと知りたいと思っている人にも、実践に取り入れたいと思っている人にも手に取っていただきたい1冊です。